

2011年3月15日
第193号

題字 住谷悦治



燎原社
(京都の民主運動史を語る会)
代表 岩井忠熊
事務局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302 井手幸喜
〒606-8107
tel & fax 075 (722) 3823

情報スクラップ/会員消息/編集後記 15

4月例会の案内 16

16

関西文理学園からバイオ大学へ 吉田保さんに聞く (下) 小田切明徳	2
「うたごえ」よ高らかに——京都の「うたごえ運動」の歩みから (II) 長砂 實肇	10
BOOK 渡辺元治著 『恋するお尻医者』	11
悼 小野一郎氏の若き頃	12
情報スクラップ/会員消息/編集後記	15

伝えられなかつた京都大学国史学専攻の歴史——十五年戦争期の一断面 岩井忠熊
創刊当時の『夕刊京都』のこと (9) 1950年新聞通信放送分野のレコード
〔バージと『夕刊京都』創刊理念の終焉〕

（京都人文学園創立30周年記念世話人会「わが青春 京都人文学園の記録」を参考にしました。写真も同書より）

連載

この一枚

「京都人文学園」開校から65年
巣立った500人、誇りの母校



昼間部第2回生入学式(1947年5月18日、山口教会館)。
講師も学生も若く、希望にみちた顔々々。

寺町丸太町を北へ、御所の東南に山口佛教会館があつた。敗戦の翌年、1946年6月、ここで京都人文学園は開校した。5月に入学考査があり応募者300人から102人が入学、最初の講義は新村猛学園長が行つた。講師陣には 久野収・青山英夫・重松俊明・藤谷俊雄・重沢俊郎・菅泰男・佐々木時雄・岩井忠熊・細野武男・鶴見俊輔・田畠忍ら氣鋭の学者たちが顔を揃え、羽仁五郎・新村出・住谷悦治・末川博・湯川秀樹らも講演した。

「当時、日本には明治維新以後もつとも見るい潑刺とした雰囲気がみなぎついていた。われわれはみな自由を享受し民主化を謳歌した」と新村は30周年記念誌に記している。

しかし、学園経営に行き詰まり、姉妹校・関西文理学園の設立などで乗り切ろうとしたが、うまくいかず結局、1957年3月、夜間8回卒業式でその幕を閉じた。

学園は、堀江友広氏の私財が投入され創設されたが、空前のインフレで資産が目減りしたこと、卒業しても資格が与えられなかつたのが原因といわれる。しかし、500人の若者が人文学園で学び「行動の人として思考し、思考の人として行動する」(創設趣意書)ことを身に付けたことは、戦後京都の民主運動に大きく貢献したといえる。「京都人文学園卒業」は卒業生の誇りであつたのだ。卒業生は今年6月5日に65周年記念のつどいを開くという。

伝えられなかつた 京都大学国史学専攻の歴史

岩井忠熊



執筆者紹介

岩井忠熊（いわい・ただくま） 本会代表、

立命館大学名誉教授。右京区在住。

ノ瀬秀文（いのせ・ひでふみ） 大阪市立大学名誉教授。元「夕刊京都」記者。

小田切明徳（おたぎり・あきのり） 本会

志摩肇（しま・はじめ） 行政書士、中京民商専任理事、京都ひまわり合唱団団員。中京区在住。

長砂實（ながすな・みのる） 関西大学名誉教授、日本ユーラシア協会京都府連会長。

敗戦直後に復学したが：

京都大学旧国史学専攻学生だつた人たちには、教官とともに大てい数年上の先輩や同年の学友たちとの交流から、研究上の刺激や影響を受けたと語る例が多い。しかし私が敗戦直後に復員し、大学に復学してまもなく西田直二郎教授と中村直勝助教授（三高教授の兼任）が教職追放となり、国史の主任は原隨園教授（西洋史）が兼任された。だから私は国史学専攻の教官たちからほとんど影響を受けることなくおわつた。小葉田淳教授の着任は私の卒業以後になる。数年の先輩という方たちは戦争による学業と研究の中止のために層がうすく、私たちに影響を及ぼすことがすくなかった。また当時の学生は入学年や復員時期がまちまちだったために、敗戦直後の経済事情も手伝つて、同級生の交流もほとんど実現しなかつたのである。私自身は日本史研究会に出て、そこで先輩たちから大きな影響を受けるようになつた。その方たちは私よりほか一〇

年前後の先輩にあたつた。

清水三男（一九三一年卒、以下、一九五〇年卒）、瀬津正志（三三二年卒）、

田井啓吾（三三年卒）らの先輩が治安維持法による弾圧を受けたことはよく知られているが、清水、田井氏らは私たちと面識を得る機会もない内に死没され、瀬津氏は東京在住だったので、私は一度お会いしただけだつた。だから私が強い影響を受けたのは藤谷俊雄（三七年卒）、奈良本辰也（三八年卒）、林屋辰三郎（三八年卒）氏であり、後に前田一良（三二年卒）氏からもさまざまの影響を受け、また回顧を聞く機会にめぐまれた。

滝川事件と西田直二郎教授

私は最近に内務省警保局『特高月報』と司法省刑事局『思想月報』を復刻版によつて通観し、また多くの人の回顧録等を読んで、先輩たちかの回顧録等を読んで、先輩たちから聞いた話を思い出し、一九三三年の滝川事件が国史学専攻の学生たちにも大きな衝撃となつた事情を今さらのように知ることができ、またそれが先輩たちの戦後にまで尾を引いていたことを理解するようになつた。

そうした行動にさいして同行した

た。同事件については同学松尾尊允氏の好著『滝川事件』（岩波現代文庫二〇〇五）にゆづる。当時の学生運動についても同書は大要を語つているが、国史学専攻とのかかわりという側面から補足してみたい。

学生の一人は哲学科の久野牧氏（三四四年卒）だったようだが、久野氏の回想『市民として哲学者として』（九年五年毎日新聞）は哲学科の学生。

院生の動向にくわしく、史学科の学生・院生についてはほとんど言及していない。しかし私には前田氏がその時に知り合つた久野氏や物理学の武谷三男氏（三四四年理学部卒）についてなつかしく語られるのを聞いた記憶がある。

文学部教授たちの中ではつきりと法学部支援に賛成したのは哲学の田辺元、中国哲学の小島祐馬教授だけであり、好意を示したのが考古学の浜田耕作教授だつたという。とにかく結果的には文学部や各学部教授会はそれら学生・院生の意向に反し、法学部支援を打ち出さずに終わった。

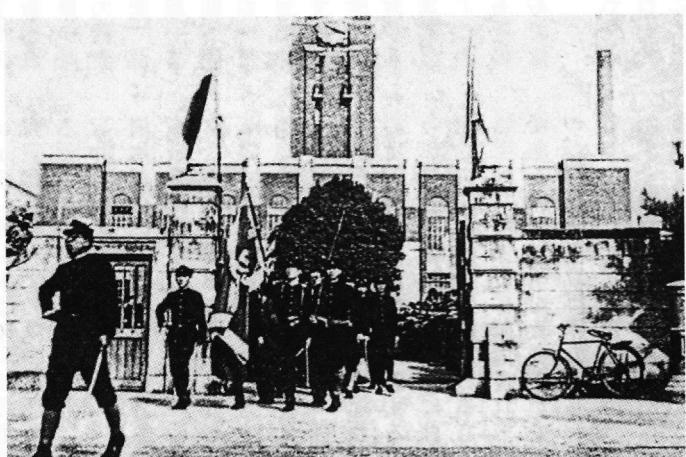
したか。当時の国史学教授は西田直二郎教授ひとりだった。その西田教授は学生が主体となつて刊行されて、紙面に滝川事件についての報道・論評の禁止を指示した。法学部教授会支援の立場に立とうとした堀川直義氏（三五年文学部卒）ら編集部員八人は声明を発して西田部長に抗議し、退部するにいたつた。そこであらたに編集部員が募られることになつたが、参加した新編集部員は西田教授の門下生を中心とする歴史学のグループと、滝川事件の終息のあとも活動をつづけた高代会議の流れをくむグループが存在したと伝えられている。

事件一周年の三四年五月二六日には高代会議グループの一部によつて法経新館二階から「想起せよ 五六」のたれ幕がおろされ、大学によつて撤去されるという事件があつた。各新聞はこぞつてその写真を掲載したが、『京都帝国大学新聞』にはなんの記事も出なかつた。

前年の学生大会や高代会議で活躍した有志たちは二六会という組織をつくつて運動の再興を期していたが、二周年の三五年五月二六日には東一条のドイツ文化研究所で玉碎組の佐々木惣一・末川博・滝川幸辰教授らをはじめ事件当時の助教授・講師らも出席する記念講演会を催し、三〇〇人余の学生が集まつて立錐の余

地もない盛況となつた。新聞部員はこの集会を取り材し、記事を掲載しようとしたが、西田新聞部長は断固としてこれを禁止した。この再度の言論を抑圧に對して前橋正二（三七年文学部卒）、姉歯仁郎（同年経済学部卒）、関原利夫（同年経済学部卒）、村井満次（三六年経済学部卒）、鳩信正（三七年文学部卒）氏の五編集部員が抗議の声明書を発して退部するにいたつた。前橋氏は西田教授が主宰する国史学専攻の学生である。

『学生評論』発刊と弾圧



京大正門前を出発する学徒出陣（1943年11月20日）

新聞脱退組の学生たちは、学内の新聞では大学の干渉を受けることになるから、いつのこと学外に本拠をおく言論機関をはじめようという話でまとまり、三六年五月から雑誌『学生評論』を発刊した。発行所は大阪の大同書院となつてゐる。第一号「発刊のことば」の起草者は前記の国史学生前橋氏だつたといわれる。同誌は三七年六月発行の第二巻第二号でおわつた。七月に盧溝橋事件がおこり、また財政の困難という事情も重なつたから、やむをえないといえる。同誌には復讐によるところと質問したところ、検査は個々の号にはとくに問題ないところが問題なのかと質問したところ、された人が取り調べに際して同誌のない合法的な刊行物だった。検査は勿論内務省の検閲を受け、一度も削除や禁止等の処分を受けたことは數十人に及んだとされている。同誌は勿論内務省の検閲を受け、一度

その後につづく検査者には国史学専攻三七年卒の鈴木光次、深谷芳太郎氏、三八年卒の小野義彦、越川正啓氏らがいた。奈良本辰也氏も二六会やこれらのグループの研究会には参加したらしいが、きわどいところで検査されなかつた。三七年卒の国史学全学生数は二〇人、三八年卒は二五人である。その中で弾圧された人たちのしめる比率の高さには驚く。率になるのではなかろうか。参考人として特高警察の取り調べを受けた周辺の人たちはもつといたと推察される。小野義彦氏（前記）などは従軍中の四三年になつてから、はるばりの天皇機関説が問題とされ、高等文官試験の参考書として版を重ねてやつてきた憲兵に逮捕され、軍法会議

きた同博士の著書『憲法撮要』さえ発売禁止となつた御時勢であれば、戦争とファシズムに対する批判的な論調を基本方針とした『学生評論』もいづれは弾圧の対象となることをまぬかれなかつたといえよう。とくに同誌で主要な役割を演じた永島孝雄（哲学科卒、非転向獄死）、藤谷俊輔（前記）、姉歯仁郎（前記）、西田直二郎（前記）、内海省三郎（三八年経済学部卒）、関原利夫（前記）の諸氏が検査されたが、当然に弾圧されそうな前橋氏は遠い函館の中学校に在職していただめかこの検挙をまぬかれたといわれる。

に付された。これらの人たちは、不起訴、起訴猶予、執行猶予、実刑、非転向獄死など、さまざまの運命が待ち受けていた。

西田教授追放・免官

戦後、西田直二郎教授はいち早く教職追放・免官となつた。西田教授の『日本文化史序説』や『日本文化史論考』等の著書を読んだ人は、この内容で教職追放にあたるのかと不審を覚えるかもしれない。だが西田教授は著述の内容で追放されたのではない。教職追放令で適格審査委員会の審査を受けるまでなく不適格の指定を受ける、いわゆる「自動追放」となつたのである。閣令・文部省令第一号（四六年五月七日）の別表第二は、教職員不適格者として、審査にかけないで「指定を受けるべき範囲」の中に、国民精神文化研究所の勤任官および奏任官をあげていた。三二年八月に鳩山文相が学生問題調査委員会の答申にもとづいて「わが国体、国民精神の原理を闡明し、国民文化を啓培し外来思想を批判し、マルクス主義に対抗するに足る理論体系の樹立」を目的として設立した研究所である。その活動実態は省略するが、西田教授は三四年以来の勤任所員だつた。この別表第二によらないでも、『京都帝国大学新聞』部長として再度にわたり言論を弾圧し、それに抗した学生たちが『学生評論』

を刊行して治安維持法の弾圧を受けたという争えない事実がある以上、個別審査に付されても教職追放をまぬかることはできなかつたであろう。

『学生評論』（三七年一月号）は「花形教授列伝」で西田教授を取り上げた。筆者神田八郎は小野義彦氏のペンネームとされている。平泉澄教授と西田教授を対比し、「片や東大国史学派の伝統の中に烈々たる国家主義者として立てる時代の兒平泉氏と、片や旧都の一角に人間精神の光背に包まれて日本文化を省察する西田氏との対立」を見ながら、平泉氏から「国家精神」の欠如乃至不足を歎かれて「リベラリスト・コスマポリティヌ」視された西田教授が「その社会的実践活動ではまず『京大新聞』部長として京大文化統制の一本尊、また『国民精神文化研究所』顧問、国体明徴的『教学刷新委員会』の一員として京大文化統制の一本尊、また『国民精神文化研究所』顧問、国体明徴的『教學刷新委員会』の一員」ということは、「著しい矛盾」であるとしている。また同文は「文化史家としての氏の日本文化に対する深い洞察、特に日本美術文芸に対する特異にして而も相当徹底した理解力」に対する評価も忘れていない。このような理解は、現在から見てもその妥当性を認めることができるのではなかろうか。

私が復学してはじめて出席した読史会大会（四五年一一月二三日）では西田教授の講演「国史研究の方向」

があり、「天皇制」の當否が論議される敗戦後の日本社会を憂える等の意見が述べられた。その後の座談で藤谷俊雄氏が今次の大戦に果たした国史学の責任を検討する必要と天皇制の解明を主張されたことも明らかなる記憶としてある。私は生まれてはじめて天皇制の論議を耳にして、一種のショックを受けた。

清水三男論文

『日本史研究』の発行、日本史研究会の創設準備が、その頃にはじめられたことは同誌第一号（四六年五月三〇日発行）の彙報に明らかである。第一号の巻頭には清水三男氏の「近世の農政思想」が掲載されていた。清水氏は応召に際してその原稿を林屋辰三郎氏にあずけ、「可能な時期がきたら発表するよう取り計らつてほしい」と依頼していた。当時生死の消息も不明だつた清水三男氏が論文を掲載されただけでなく、日本史研究会創立委員にまで名を連ねていたのは、同氏が無事に帰還するであろうことを予定し、その時には必ず積極的に同会の創立に加わるであろうことが、関係者に確信されていたのである。また西田教授らが追放となつた国史学専攻再建の中心となられるであろうことも強く期待されていた。それだけに清水氏がシベリア抑留中に死去されたことが伝わつた数

年後の関係者たちの落胆は大きかつた。

なお敗戦直後の国史学専攻で波紋を生じた一事件として、西田教授追放の確定以前に、藤谷俊雄氏が京都

大学新聞社発行の『学園新聞』（四六年五月一一日号）に「進歩の敵文化史観——西田直二郎教授の公罪——」と題する一文を発表された。その内容

ところがあつたのかと評したが、西田教授が部長として、『京都帝国大学新聞』でおこなつた言論抑圧に抗した人たちがやがて検挙された経過を考えれば、単なる私怨というより公憤という方が正しいであろう。この問題は掘り下げれば学説内容にいたる検討課題がうかび上がる。いまその準備がないが、将来のために問題の所在だけをしめすとどめておく。なお以上の史料や参考文献については別の機会に発表の予定である。また以上に記した人たちの学部や卒業年度には正確でない点があるかもしれない。読者の教示を得ることができれば幸いである。

本稿は、京都大学文学部読史会発行「國史研究室通信」2010秋・第41号に掲載されたものを転載させていただきました。
(編集部)

創刊当時の『夕刊京都』のこと

(9)

一ノ瀬秀文（大阪市立大学名誉教授）



1950年新聞通信放送分野の理念の終焉 レッド・ページと『夕刊京都』創刊

五

前号の終わりの項で、49年になるとGHCIEのインボデン新聞課長が全国各地をめぐつて講演し、これから新聞の編集では「反共」ということを念頭に置くようになると剥ぎだしに要求する事態となつたことを紹介した。これが、まさか、新聞・通信・放送分野での全国的なレッド・ページの前触れだとその時思つた人は少なかつたとも思える。

ところで、平田哲男氏の、日本戦後史について新しい資料と視角からの解説を意図した注目すべき労作の一つ『レッド・ページの史的究明』（2002・新日本出版社）のなかで、1950年7月の新聞・通信・放送分野での全国一斉のレッド・ページについても、精細な解説が与えられている。平田氏は、このレッド・ページがレッド・ページの本格的展開

ド・ページへの方向転換」を示す重要な指標と位置づけている。朝鮮戦争勃発（北朝鮮軍の南への侵攻）（6月25日）を直接的契機とし、それを口実として「アカハタ」とその後継紙の無期限停刊を指示した7月18日付マッカーサー書簡を拡大適用して、新聞・通信・放送分野でのレッド・ページが強行され、さらにその他の分野にまで広げられていった。

49年の夏、忘れられない記憶

しかし、これが48・49年段階で全く意図され、計画されていなかつたとは、次に紹介するような事実からみて、とても考えられない。GHCQが諜報部を使って新聞・通信分野の「赤色分子」を一人一人調査していたのである。

私の記憶している、忘れられない

事実というのは、49年の夏頃の次のようなことである。夏頃だというのには、秋になつて私は肺結核で休職し、暮れには入院したので、それ以前の話ということになる。私が取材を終えて、烏丸丸太町の市電の停留所を降りて、社に戻ろうとして、交叉点を渡つたところで「浜ヤン」（共同通信の浜田薰記者）とバッタリ遭つた。

「おい、一ノ瀬、大分ややこしいことになつてきた。CICが僕らのことを一人一人リストをつくつて、各人別の調査書を作成しとる。俺の人は見ついた。こんな部厚いものやつた。お前のもある筈や。あいつらは何かやろうと思とるのやなあ。気イつける」と言って、行つてしまつた。チヨビ髭を生やし、細縁眼鏡をかけて、腰をかがめて歩く「浜ヤン」が超ベテラン記者で、京都産別議長

という難職をつとめるようなしたたかな人物だとは到底思えない外見をしていた。

しかし、彼の話は、その時だけで、しかるべきところで重要な議題とし

て問題にされ、議論されることもなかつた。47年の参院選に共産党候補に出た能勢克男が党員だったかどうかは判らない。党員だったとしても、彼は経営陣に属し、われわれとは別であつただろう。当時の『夕刊京都』の細胞会議は定期的に開かれることがなく、しかも年に一、二回開かれればいいほうではなかつたかと思う。また、会議の議題も予め準備されることはなく、行き当たりばつたことで、会社の運営、編集・紙面のありようなどについて議論することはほとんど全くなかった。新聞記者が、定期的あるいは定時に集まるということは職業柄とても難しいという事情があつた。それに、『夕刊京都』のメンバーの多くは新聞社の職務以外にも専門分野の人間関係などがあり、多忙であった。

「浜ヤン」の話に戻るが、彼が確認したように、占領当局が、レッド・ページ対象者の確定とその人物調査を、日本のさまざまの機関の手も藉りつつ進めていたことは確かで、決して突然のことではなかつた。49年が、インボデンによる新聞社にサジェスションのレベルにとどまつ

ていたわけではなく、また、レッド・ページ方針は50年になってからというものではなかったのである。レッド・ページの準備は少なくとも49年には着手され進められていたと見るべきである。

元日号一面にマ元帥「年頭の辞」

50年に入った途端、『夕刊京都』の紙面はガラリと変貌した。そして、50年1月1日、全く異例な新聞が読者の目に飛び込んで来た。他紙も同様であるが、元日（4ページ建て）号の1面に、「マッカーサー元帥の年頭の辞」が4段組みの極めて長いステートメントの形で全文が出た。それには【涉外局一月一日発表】マッカーサー元帥は一月一日、新年にさいして、日本国民につきの声明を発した」という前文が付されている。「日本国民諸君」という呼びかけに続く、長い年頭の辞は要旨つきのとおり。

終戦後五度目の新年を迎えるが、この間に、日本は自由で民主主義的で平和な国への変貌が大きく進み、「世界で日本より平和な国は数えるほどしかないくらいである」、財政は安定し、インフレは収束し、農業、漁業もよくなり、自由企業も目ざましい成果をあげ、産業も復興し、貿易もうまく行っている。これにケチをつけようとする者もいるようだが、米日両国民が誇りとされる前進が見られる。「新しい年を迎えるにあたって、現

在あらゆる日本人がひとしき不安にかられている一つの極めて重要な未解決の問題がある。その一つは中国が共産主義の支配下に入ったため全世界的なイデオロギーの闘争が日本に身近なものとなつたこと、もう一つは対日講和会議の開催が手続にかんする各国の意見の対立から遅れることである。「これらの問題が解決されるまでの日本の進むべき道は：日本はただ憲法に明示された途を迷わず、搖るがす、ひたすら前進すればよい」

48年には、「日本国民に与う」という「マ元帥声明」が『夕刊京都』に出たのは1月3日号で、それもコラムとか社説、「二重橋を渡る一般人の人の波」の写真や一般記事に挟まれるかたちで掲載されていた。

50年には様相が一変した。1面上半分は、各国首脳の顔写真で、マ元帥がトップ、トルーマン米大統領の写真がその下、そしてスター・リンと毛沢東は左下に置かれていた。これららの写真の下に、長文の「マ元帥の年頭の辞」が、元日の1面を独り占めするかたちとなり、マ元帥が大きく前面に出してきた。

50年に出された一連の「マッカーサー書簡」と称するものについて、平田氏はつぎのように特徴づけてい

して後年最高裁判所が肯認した同年七月一八日書簡に至るまで、さらに四通の書簡を吉田首相に送致している。これら合計六通の声明と書簡は年頭の辞とともに、一九五〇年の日本のあり方を根底から規定した最も重要な政治的文書である（183ページ）。

平田氏によると、『夕刊京都』など各紙に出た「マ元帥の年頭の辞」

は、「50年のレッド・ページ（レッド・ページ第三段階）にかかるる『最も重要な文書』の一つ」であつた。平田氏は、「年頭の辞」で「日本が政治的に一人前となり社会正義と経済自立を達成して、自由な国際社会のりっぱな一員として深い尊敬をうける日が遠くない」と集約的に述べられているところ（とくに傍点の部分）こそ「反共国家構築論」以外のなにものでもなく、それを日本国民に呼びかけたのがこの文書だと指摘される（184～5ページ）。

これは極めて鋭い指摘で、50年の「年頭の辞」の異例で異様な発表の意味をこれまで読みとることができ。これが、レッド・ページの第三段階、民間分野のレッド・ページの真先に襲来した新聞・通信・放送分野のそれを告げる合図でもあったわけである。

再引用にて汗顏の至りであるが、つぎのような事実経緯も明らかにされている。

「この書簡から一週間後の七月二四日、GHQ公職課のネピア少佐は、主要新聞の経営者を集めて「マッカーサー元帥が命令にもとづいて社内の明白な党員およびシンパを全部追い出せ。これは司令部の命令ではないから、経営者各自の責任に

6日付吉田首相宛て書簡で日本共産党中央委員24人全員の公職追放、さらに6月7日付書簡で、同党中央機関紙『アカハタ』の編集責任者17人の追放を指令した。

さらに、6月25日に朝鮮戦争が勃発し、その翌26日付の吉田首相宛て書簡によって、『アカハタ』の30日間発行停止が指令され、輪転機や活字、新聞用紙の押収、用紙の配給停止が強行される。そして、またさら

に、7月18日付書簡によつて『アカハタ』とその後継紙の発行無期限停止が指令されるに至つた。

平田氏は、この7月18日付書簡の内容を論理的に忠実に読めば、それが『アカハタ』とその後継紙の無期限停止の直接指令であることに疑問の余地がないにもかかわらず、それが一般新聞を含む報道機関全体から

の共産党員および同調者の追放といふことをも意味していると歪曲され、拡大解釈されてそれが強行された、と指摘している（190ページ）。

再引用にて汗顏の至りであるが、つぎのような事実経緯も明らかにされている。

「この書簡から一週間後の七月二四日、GHQ公職課のネピア少佐は、主要新聞の経営者を集めて「マッカーサー元帥が命令にもとづいて社内の明白な党員およびシンパを全部追い出せ。これは司令部の命令ではないから、経営者各自の責任に

アカハタ幹部追放を拡大解釈

そして、5月3日の憲法記念日のマ声明、これを受けるかたちの6月

おいて遂行されたい。しかし、司令部は背後から支援するし、また国警や労働委員会などにも、それぞれ指示してあるが安心して施行せよ」と指示したのである」(朝日新聞社レッド・ページ証言録刊行委員会編「一九五〇年七月二八日」、晚報社、「一九八一年、四〇ページ」引用)「レッド・ページの史的究明」190ページ。傍点は平田。圈点は「ノ瀬」。

このようにして、「レッド・ページ第三段階」への突入となつた。なお、「浜ヤン」のところで述べたように、これらの遂行は、裏面で秘密裡に蠢動していた C I C (Counterintelligence Corps. 対敵諜報部、のちの C I A)、特審局(法務府特別審査局)、日本の元「特高」(特別高等警察)などの諜報活動の役割を見落としてはならない。

こういうわけで、『夕刊京都』でのレッド・ページが、個別企業内で行われた単独の出来事ではなく、国際的、歴史的背景を持ち、占領当局の直接指令や声明、書簡による指令・指示に発し、国内法令(ボツダム勅令、ポツダム政令をふくむ)に依拠して日本政府が実施した全国的規模の同時的事件の一つとして起つた。

「放送・新聞関係でのページは、NHKの一九人、『朝日新聞』の一〇四人、『毎日新聞』の四九人など五〇社で七〇人(労働省「労運動史」一九五〇年)。中には、『夕刊(京都新聞)』(注1)のように、全従業員八五人のうち一人が追放された例もある」(平田哲男「レッド・ページ思想・論議弾圧事件からいま、学ぶことは」『週刊金曜日』2006年7月28日、616頁3ページ。なお)の

る。『夕刊京都』は被追放者数の大さまで上位の部に属しているが、従業員総数に占める割合でも高かつたことに平田氏は特別に注目している。

論考の英訳と紹介文がある—Japan's Red Purge: Lessons from a Saga of Free Speech and Thought, by Tetsuo Hirata, Translation by Ben Middleton; Z Communications [http://www.zcommunications.org/japans-red-purge...] また、平田著216ページにも同様の文章がある。

(注1) 正しくは『夕刊京都』、もしくは『夕刊京都』新聞と表記すべきである。会社名は夕刊京都新聞社と記す。49年に

京都日日新聞社が京都新聞社に合併され(形式は対等合併)、「京都日日新聞」が消滅し、それに代わって『夕刊京都新聞』が京都新聞社から発行されるようになつた。当時は、朝刊新聞社が自社紙の夕刊

[注記]

○ 労働省調査は、一九五〇年一二月一〇日現在、五〇社、七〇四人。「資料労働運動史」昭和一五年版、一二八~一二九ページ。日本新聞協会調査は、一九五〇年八月末現在、四九社七〇人。「日本新聞年鑑」一九五一年版、八ページ。○印は労働省調査と異なることを示す。数値または※印のない会社については、国立国会図書館編「社史・経済団体史目録」(一九八六年)によつて、社史が未刊行であることを意味している。
①「共同通信二十年」(一九六六年)は、三人と記載。②「全員退職」と表現。③当初一七八人、二人復職。④半年後に三人復職。⑤「高知新聞五十年史」(一九五四年)は、五人と記載。⑥「北日本新聞分編三十年史」(一九七八年)は、一人と記載。

[参考]

マスコミ界のレッド・ページによる被追放者数

会社名	労働省 整理 通告数		日本新聞協会 前 追職者		各社史 放 依 退社数	
	事 前 追職者	放 依 退社数	放 依 退社数	放 依 退社数	放 依 退社数	
N H K	119	0	119	0	119	
朝 日	104	0	104	0	104	
毎 日	49	0	49	0	49	
中 日	36	0	28*	8*	36	
共 同 通 信	35	0	34*	0	34 ^①	
北 海 道	35	0	35	0	36	
院 宽 国	34	0	34	0	34	
中 国	21	0	21	0	21 ^②	
河 北	20	0	20	0	20	
日 本 縦 線	20	0	20	0	20	
山 形	18	0	18	0	*	
西 日 本	17	0	11*	6*	15 ^③	
フ ク ニ チ ト 信	17	0	23*	0		
時 事 通 信	16	0	16	0	16	
夕 刊 京 都	11	0	10*	1*	11	
上 海 毛	11	0	11	0	*	
日 本 海	9	0	9	0		
伊 势	9	0	9	0		
東 京	8	0	0*	8*		
愛 媛	8	0	4*	0	8 ^④	
神 戸	7	0	0*	7*	7	
南 日 本	6	1	6	0*	6	
都 経 国	6	0	6	0	*	
四 藤	6	0	6	0		
島 大 関	6	0	2*	0*		
阪 館	5	0	6*	1*		
名 古 屋 タ イ ムズ	4	0	6*	0		
知 高	4	0	4	0	4 ^⑤	
山 新	4	0	0*	4*	*	
岩 手	4	0	4	0	4	
新 球	4	0	4	0		
千 葉	3	1	0*	3*		
北 国	3	0	1*	0	*	
山 隆 日 本	3	0	3	0		
茨 城	3	0	3	0		
岡 山 新 報	3	0	3	0		
日 向 日 本	3	0	2*	1*		
岩 手 新 報	3	0	3	0		
岐 阜 タ イ ムズ	2	0	0*	2*		
東 京 タ イ ムズ	2	0	-	-		
新 大 阪 川	2	0	2	0		
石 井	2	0	-	-		
中 部 經 通	2	0	2	0	*	
北 時 事 新 聞	2	0	-	-	*	
富 岡	2	0	2	0		
島 根	1	0	1	0		
山 嶺 時 事	-	-	3	0		
長 嶺 日 本	-	-	2	0		
宮 崎 日 本	-	-	-	-	3	
(計)	701	2	659	42		

平田哲男『レッド・ページの史的究明』新日本出版社、2002年、214ページ。

私が、ページから数年後、大学の

関西文理学園からバイオ大学へ

元機関紙協会事務局長
吉田 保さん

に聞く

(下)



予備校生は、最高時には4480名(1967年)に達し、59年間に約10万人の生徒を教えたことになります。この間、単に「受験指導」に終わらずに、全人教育を目指し、学園の運営に当たっては民主的運営を貫いたのです。

——聞き手(小田切明徳)
「上」

では、峰山で労働運動を進めたこと、京都市に出てきて機関紙協会に入り、活動を進める中で「平和のための戦争展」に取り組んできたことを中心にお聞きしました。今回は学園経営で果たされた役割に焦点を当てたいと思います。私が吉田さんを知るようになったのも実はこの後でした。「関文理(かんぶり)」と大學受験生に愛された関西文理学園の運営に関わるようになられる頃からのことをお話し下さい。

「人文学園」の灯を消さず、全面発達保障の予備校として

日本の人口構成で、少子化傾向が顕著になり、私学教職員組合連合(私教連)傘下の立命館、同志社、龍大等で受験学生が減つて来た、それに伴い予備校の存続も大きな影響を受けることになり、進学戦線の予備校で大変な事態が予測されたんですね。こうした中で、関文理でも原点にたち返つてみる必要がありまし

た。関文理では、教育方針が進学者教育と全面発達の保障を掲げてきた。京大の宮地伝三郎先生らの主張する民主教育の伝統です。戦後の京都人文学園の果たした役割を、京都ではこの灯台の灯を消さないようにとの評価があり、これを大切に守りたいという思いがあった。それを各大学

前に申し上げた冊子「建学の理念に導かれて」で詳しく述べられています。これは1946年の京都人文学園にルーツがあります。この学園はファシズムに反対する雑誌の『世界文化』を出していた新村猛の呼び掛けによって、歴史学者の藤谷俊雄、弁護士の能勢克男らが賛同して創設されました。「因習に束

建学の理念に導かれて

の先生方が協力してくれた。他方、労働者の学習の場の保障である京都勤労者学園もその重要な一環でした。それは「建学の理念に導かれて」という冊子の中にそのことが強調されています。

長浜バイオ大学を設立、理事長として軌道に

——さて、最後になりますが、バイオ大学のことともお聞かせください。

縛られない民主主義教育の実践』を、合言葉に一風変わった私学がでました。ところが少し経ち新しい教育制度が整備されてくるとこうした民主的な学校経営は困難になり、進学への希望を援助する予備校事業へとシフトして51年に「関西文理学園を開校、進学希望者のニーズに応えるように体制を変えるとともに、人文学園への援助を同学園が「京都勤労者学園」に統合されるまで続けま

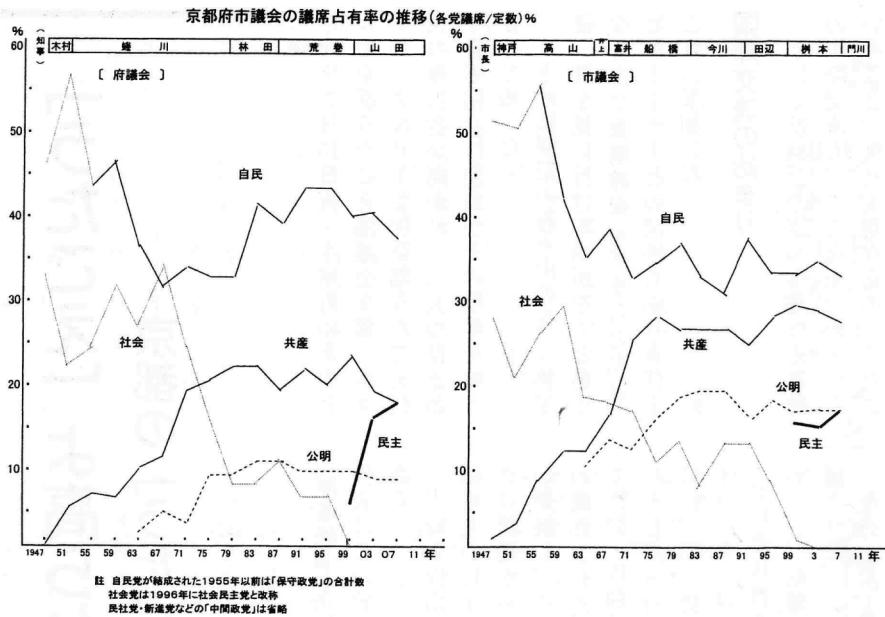
——どうも、ありがとうございます。工夫や努力をしました。やっと軌道に乗つたと思いますが、その理事長としての要職を務めてきました。

——まだまだお聞きしたいことがあります。今後、例会のゲストにも来ていただけますので、またそんな機会にしたいと思います。

健闘する京都の共産党

2月例会は2日午後、かもがわサロンで開かれ、会員の宮田栄次郎氏（京都社会労働問題研究所）が「京都における地方選挙の歴史的考察—共

「産党支持票の動向を軸に」と題して一時間半にわたって報告しました。



使つてよく動いてい
る」「われわれが19
50年の『民統』選
挙の教訓を伝えてい
く必要がある」など
活発な意見が出され
ました。

存、これを基に戦後16年、府市議選の略史、府市議会勢力の変遷と現状、共産党支持票の動向と4月選挙の展望などについて、図表を駆使して説明。

この中で、京都の共産党が府市議選では「健闘」していること、中央で政権党となつた民主党が、京都政界でも第一党をねらつて強気の戦術に出でていること、さらに「京都党」「みんなの党」の初参入にも触れました。

BOOK

渡辺元治著

(かもがわ出版)



昨年3月に亡くなった肛門科医・渡辺元治先生の書斎に膨大な原稿が残されていた。役員をしていた府保健医協会や府市民団体協議会、京都原水協などの会報に書かれたもの、共産党候補や知事・市長選挙での応援演説、住民運動での街頭での訴え、集会メソージの草稿などが大事に保管されていた。

涙あり、怒りあり、笑いあり

町医者の心音氣示す遺稿集

つたりさせられる。そこには、お尻の穴から社会を見続けた町医者の心意気があふれている。声高に主張を押しつけることはしないが、患者や弱者はに注がれるやさしい眼差し、核兵器廃絶に向けた情熱には共感させられる。

渡辺先生の原点は、海軍兵学校が廃校になり、1947年に三高に入学、ここで学んだ体験にある。物理学者・武谷三男の講演を聞き「人民を恋するこころのしあわせを身にしみて味わえるようになりたい」という「生き方」を決め、その後の人生を貫いてこられたことが、この本を読み理解できた。

卷末に和代夫人と長男（三）

192頁・1470円(税込)

「うたごえ」よ高らかに！

京都の「うたごえ運動」の歩みから

志摩 肇（京都ひまわり合唱団創立参加者）

その11

去年7月15日夜・木屋町のあるビルで京都うたごえ協議会主催、ニューヨークN.P.T.参加京都うたごえ代表の報告会が開かれ、二人のひまわり合唱団女性団員がその模様を嬉々として語った。

ときは祇園祭の宵々山の夜、「終了後、鉢を見に行ける場所を」と勝手な理由で会場確保を頼まれた私は、ビルオーナーとの関係もあり責任上、これに参加した。

国際交流の始まり

そして思ったのは「うたごえ運動の国際交流も、ここ迄来たか…」といふこと、併せて現在迄の「うたごえ国際交流の歴史」を思い出さずにはいられなかつた。

♪ふるさとの街焼かれ

身よりの骨埋めし焼土に：

うたごえの本格的国際交流の起こりは、1955年ポーランド・ワルシャワでの世界青年学生平和友好祭に、日本のうたごえ代表が参加し

「原爆許すまじ」の演奏と併せ、各国代表にこの歌を普及したことからである。

当時久保山さんの死に至つた第五福竜丸のビキニ被爆、そして原爆マグロ問題から全国的に原爆反対運動が発展し、この運動を支え拡げるため創作されたのが「原爆許すまじ」で作詩・作曲者とも労働者。

そして8月6日・ヒロシマ原爆の日に、旧ソ連・中国・フランス・ドイツ・チエコ・朝鮮の7カ国代表が、「それぞれ自國語で一丸となり大合唱」し、原爆反対を世界の流れに発展させた。

今の若い人には、「歌詞が古風」「メロディも今イチ」と敬遠されてしまう曲だが、では「これに代わる良い歌を、プロも含め當時誰か創つたか?」「この歌が日本と世界の原爆反対運動に果たした役割を、どう評価するのか?」と言いたい。



1万人が参加した李徳全女史歓迎府民集会（1954年11月、円山音楽堂）

♪アジアの兄弟よ
はらからよ：

知る人も多いが「東京—北京」で、1954年10月・中国平和使節「李徳全女史」来日歓迎が全國規模で取り組まれ、労働組合・民主団体に「通過道筋・宿舎（京都では都ホテル）警備」が呼びかけられた。このとき「根こそぎ動

これは翻訳すると「進めよ」との題らしく、朝鮮の子供たちがよく唄つており、我々も樂譜を貰って覚え演奏もした。以上の二曲の歌詞は全く私の記憶に残っているもので、記憶違いがあればご容赦願いたい。

この歌は朝鮮で「ヘバゲノル」解放歌」と題され、朝鮮青年の集会に招かれた我々が、ウロ覚えの朝鮮語で唄うと「場内マサに熱狂!」不当な戦後処理で南北分断された上、今となつては原因が何であろうと朝鮮民族同士が血で血を洗う戦争の最中、「祖国に帰るに帰れぬ」朝鮮青年の心を思う我々の心境は複雑だったが…。

♪チョーソー・ネー・テージュン
ドラ・ツールー・ボアーラー…

♪ウエイチヨーナガヤトムヤー
セイジヨソンイムネ ヤンサヨー

員」がかかり、警察と対峙しながら徹夜した仲間も多数あり、今でも當時の思い出話は尽きない。

この女史訪日を記念する歌創りが行われ、いずれも中央合唱団員の下山・山本の作詩、寺原伸夫作曲がこれまで、全国的にも歓迎運動の中で拡まつた。

この李徳全女史が円山音楽堂に来られた11月6日、青山政雄京都市立音楽短期大学助教授（当時）の指揮・私のアコーディオン伴奏で仲間とこの曲を演奏した。

♪森の緑豊かに
北の海を越えて：

これは「東京—モスクワ」で、一九五六年の日ソ国交回復を記念し創られ、作詩者の情報は不明だが作曲は中央合唱団一期生の藤本洋君（現ミュージック集団代表）。

京都でも円山音楽堂で記念集会があり、京都うたごえ協議会が桜井武雄京都市立音楽短期大学講師（当時の指揮・私のピアノ伴奏で演奏した記憶が残っている（但しこの日時は不明）。

1962年、フィンランドのヘルシンキでの第8回世界青年学生平和友好祭に、京都のうたごえ代表を出そうとの相談がまとまり、選ばれた直子さんが各合唱団を訪れ決意表明の第一歩として、ひまわり合唱団に来たときの模様。

今と違つて当時外国旅行は大変なことで、出入国手続きや飛行機の乗り方も知らぬはよいとしても、何といつても「費用」が大問題、「送る」と決めた以上当時としては大変な金額だったが、絶対・何としても集めねばならない。

そのため誰が考えたのかレッスン場の壁に、日本からヘルシンキ迄の手書きの地図を貼り付け、それに切り抜いた直子さんの写真をピン止めし、集まつた費用に応じて「今日はどこ迄?」「まだ半分も行けてないぞ!」

「やっとヘルシンキに着いたが、これだけなら帰つて来れないぞ!」

「私は皆さんの代表として、持てる力を一杯發揮して任務を果たします!」

日本レース合唱団の宮川直子さんが、特徴ある大きな目玉を一杯見開き、元気一杯訴える姿に集まつた人々の惜しみない拍手が止まらない。

♪モスクワのほどり行けば
変わらぬおもかげ：

これはハリトーノフ作詩・関鑑子訳詞・ムラデリ作曲でタイトルもしばり「ロシヤ」。1961年日本のうたごえ歌曲集で紹介され、ひまわり合唱団でもレパートリーとしてよく演奏した。

そして一九六四年日本のうたごえ合唱団のモスクワ訪問に、ことともあろうに「京都ひまわり合唱団専従の山本忠生君（忠やん）を出せ」との話が転がりこんだ。

当時私は既に合唱団を離れ民主工商会活動に戻つた後で、忠やんは団専従で同時に合唱団指揮者・兼研究生講師、一時的にせよ彼を抜かれる合唱団運営は成り立たず、運営委員会の議論は白熱したらしいが「日本のうたごえの国際交流に貢献し、また、彼自身の成長のためにも」と派遣した。

しかし当時、米・旧ソ連間の部分核停戦問題をめぐり、これが国際的平和運動の障害となる懸念もあり

ディ。

冒頭の歌は、帰国後の報告会で土産として発表された（と記憶する：違つていたら乞う御容赦）。

なお宮川直子さんは現在松山幸次向日市会議員夫人となり、地域で合唱団の指揮等で大活躍している。

モスクワへ山本忠生氏

「そんなとき、何を考え（旧）ソ連行きか！」と議論も白熱した。彼自身も気が進まず「要するに入団テストに落ちれば…」と、そのように戦（？）したらしいが結果として全国代表25名の一員に選ばれ訪ソ演奏参加となつた。

その政治的問題はおくとしても、このとき彼が中央音楽センターで、一流の専門家により音楽的教育を受けたことは、京都ひまわり合唱団発展に大きな力となつた。

しかし一方残つた団員にとっては大痛手で、彼が果たしていた役目を交替で埋めたがこれは容易なことはなかつたと思う。

その一例としてそのとき5月の府下公演で、代わりのアコーディオン伴奏を務めた木村治秀君が、山陰線に乗り出発した直後でもある曲の前奏に自信が持てず、皆の激励を受けながらデッキで必死に自主レッスンした逸話が今も伝えられている。

この「京都のうたごえ運動の歩み」も既に11回、私自身が団常任指揮者を降り民主工商会活動一本に戻る話を降り民主工商会活動一本に戻る話を述べて「一応の区切り」とするつもりである。

（しま・はじめ 京都ひまわり合唱団創立参加者）

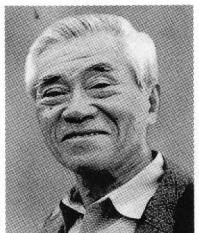
♪覚えていますかあの焼野原に
緑の草木が芽生えた嬉しさを
G・ムスタキが作曲し、ムトー・ヒロコが訳詞した哀愁あふれるメロ

成功させた。

日本レースから代表派遣

（しま・はじめ 京都ひまわり合唱団創立参加者）

悼



(写真は遺族提供)

てしました。)

京都大学宇治分校
で1952年から学
業に入った小野氏

は、直ぐに自治会活
動を含む学生運動・

昨年2010年11月2日、小野一郎氏が死去されました。享年82歳。後輩の一人として、小野一郎氏の若き頃に絞って、彼の足跡を記しておきたい、と思います。

小野一郎氏は1928年1月1日和歌山で出生。1945年8月6日に広島原爆で被災しました（彼の原体験です）。彼の身体には、ガラスが突き刺さった無数の傷跡が残っていました）。1951年に京都大学経済学部に入学しましたが、家庭の事情で1年間事実上休学を余儀なくされました。長男であつた彼は、高校卒業後数年「進駐軍」関係で働いて家計を支えていました（そこで培われた英語力は、彼の終生の「武器」となりました）。念願がかなつて京都大学に入学したものの直ぐには京都に住めない事情があつたのです。（彼が小学生と同じ1951年入学であることは後で知りました。1951年といえば、サンフランシスコ平和条約と日米安保条約が締結された年です。日本の再軍備が始動し

政治活動に身を投じました。その中で、その後「生涯の伴侶」となる才媛の理子さんと知り合いました。1951年に京都大学で「天皇事件」（京大を訪問した天皇を学生たちが「平和の歌」で「歓迎」した）が発生、京大当局は不恰當に警官隊に阻止され、欄干が崩壊して警官隊に重傷を負つた事件）が発生。この「学園復興闘争」と「荒神橋事件」とが重なつて、京都大学では、

小野一郎氏の若き頃

長砂 實（日本ユーラシア協会京都府連合会会長）

も全学学生自治会・同学会にその「責任」を問い合わせ、その解散を命じましたが、学生達は1952年に同

京大当局と京都府警に対する抗議のストライキの大波が起きました。それへの京大当局への対応が、最高の責任者・同学会委員長の責任を問う形での、小野一郎氏に対する無期停学処分だったのです。（当

副委員長の一人が小野氏でした。その後、米田氏が全学連委員長に転出したのを機に、1953年に小野氏が同学会委員長に「昇格」したのですが、全学連が「学園復興会議」を開催を提唱、その主要開

催場所を京都大学（および立命館大学）に求めたため、会場提供を拒否する京大当局と同学会との交渉が難航しました。

丁度その頃、「荒神橋事件」（立命館大学が迎えた「わだつみの像」）を歓迎すべく京大吉田分校から出發したデモ隊が、鴨川の荒神橋上で警官隊に阻止され、欄干が崩壊したため、多くの学生が川に落ちて重傷を負つた事件）が発生。この「学園復興闘争」と「荒神橋事件」とが重なつて、京都大学では、

世界を舞台に活躍しました。1956年に京大文学部を卒業した恋

人・理子さんが、「写真の小野一郎」を相手に友前結婚式を挙げてプラハに赴いたことは、よく知られた快挙でした。国際学連の任務を終えた小野氏は1959年にモスクワ大学経済学部に入学、1965年に、理子夫人と一緒に宏君（現立命館高校教諭）を伴つて帰国

しました。小野一郎氏は、帰国後直ぐ立命館大学経済学部に職を得ました。しばらくして発生した「学園紛争」の嵐も経験しました。その後、新設された国際関係学部に移り、国際センター所長も務めました。

1993年から立命館大学名誉教授。小野氏（主著は『現代社会主義経済論－理論と現状－』）は学会で大いに活躍し、「社会主義経済学会」の幹事を務めました。また、日ソ友好協会（現日本ユーラシア協会）の全国理事および同協会京都府連合会の理事長（会長は木原正男先生）・会長として、ソ連・ロシアを相手の国際友好運動に大きく貢献されました（小生が小野氏から

会長を引き継いだのが2002年です）。小野氏の一生は、世界平和と国際友好運動に捧げられたのであります。その後小野氏は東京に出て全学連で活動、1955年に国際学連書記局（プラーハ）に派遣され、その後小野氏は東京に出て全学連で活動、1955年に国際学連書記局（プラーハ）に派遣され、

（2011年2月13日記）

スクラップ



乙訓革新懇が30周年記念誌

『乙訓の民主運動』

平和・民主・革新の日本をめざす
乙訓の会（乙訓革新懇）は結成30周年
を迎えて、昨年末に記念誌「乙訓の民
主運動」を発行した。望田幸男代表
は「乙訓の水と大地と文化に根ざし
た『多様な対話のネットワーク』の
『核』となる」と未来像を「はじめに」
に書く。30年の歩み、関係者のメッセージ、131号の「ニュース」再

録など豊富。A4判168頁、頒価
800円

清水武彦さんの
「高山義三論」連載終わる

清水武彦さん（元京都市経済局長、
右京区在住）がキリスト教の雑誌
「共助」に連載していた「キリスト
者市長・高山義三論」が昨年12月号
の15回で完結した。

戦前の京都の学生運動・労働運動
の先駆者たち、京都のYMC.A運動、
青年・義三の思想と左派人民、刑事
弁護士としての活動、占領下の京都
で、「民統」市長選挙、「変節漢」説
をめぐって、「オールロマンス」事
件、文化・福祉行政の先見性など清

意味のある一年となることを願うもの
です。

貴重な存在だった千之丞さん

矢吹正夫（下京区）

15日に『燎原』が届きました。錚々
たる方々の執筆を興味深く拝読してい
ます。

井上吉郎さんの「悼」を読んで、改
めて茂山千之丞の多彩な才能の持ち主
であり、民主勢力側にとつて貴重な方
だつたことを実感させられました。憲
法集会にはたびたび出演されていまし
た。とりあえず御礼まで。

2011年は、太平洋戦争の始まっ
た年から70年目ですが、それよりも柳
条湖事件をきっかけに、中国への本格
的な侵略戦争に突入した時から80年目
ということを忘れてはならないし、私
個人にとっては「原爆展」「天皇事件」
から、60年目の節目の年でもあります。
思うことの多い一年になる予感
が致します。とまれ、この一年が、社
会進歩にとって、そして平和にとって、
思ふところの多い一年になるよう予感
が致します。

吉田保さんのこと

小田切明徳（伏見区）
1989年に山宣没60年・生誕10

「原爆展」「天皇事件」から60年
小畠哲雄（八幡市）

2011年は、太平洋戦争の始まっ
た年から70年目ですが、それよりも柳
条湖事件をきっかけに、中国への本格
的な侵略戦争に突入した時から80年目
ということを忘れてはならないし、私
個人にとっては「原爆展」「天皇事件」
から、60年目の節目の年でもあります。
思うことの多い一年になる予感
が致します。とまれ、この一年が、社
会進歩にとって、そして平和にとって、
思ふところの多い一年になるよう予感
が致します。

水さんだからこそ書ける内容が興味
深い。12万字におよぶ労作でぜひと
も1冊にまとめてほしいもの。

引野一成（網野町議、農民連会長）
松原為和（京都民医連会長）
横井多喜子（婦民ク左京支部長）

解放運動無名戦士、京都から49人合葬

国民救援会府本部は第64回解放運
動無名戦士合葬追悼会に昨年亡くな
った49人を推薦しました。次の方が
含まれています。

小野一郎（立命大教職組委員長）	河出俊一（民医労、京生連会長）
上坂幸男（京聯、自交総連委員長）	杉本利一（加悦町議七期、郷土史）
沙保雄（寿工業労組役員）	西村慶三（共産党名譽役員）
西山秀尚（共産党府議6期、団長）	八田鉄三郎（中小企業家同友会）

編 集 後 記



▼今号で連載が終わった「ノ瀬秀文
さんからの手紙」。「このような仕事
が私に降ってきたのは、何となく宿
命的なものを感じますが、私が負わ
された責務でもあつたようです。再
勉強を致しまして『夕刊京都』を再
認識することができたことは最大の
喜びです。この仕事をしなければ
『夕刊京都』について判らないまま
死ぬことになつたのですが、そくな
らなかつたのはとても幸せであります。
『夕刊京都』に印刷されて残ること
になつて、よかつたと思ひます。
忘れ去られるところでした。心から
感謝申し上げます」。

▼ご高齢で身体も不自由ななか、國
立国会図書館関西分館や府立総合資
料館に何度も通い資料を集め、かつ
ての同僚から聞き取りするなどの努
力には本当に頭が下がりました。2
009年9月号以来、9回の貴重な
原稿執筆ありがとうございました。

▼前号の訂正。「吉田保さんに聞く
(上)」の中で、「1982年、第1
回京都の戦争展」とあるのは「19
81年」の誤り、また「京都総評の
常幹も務めました」は事実ではあり
ませんので取消します。(湯浅俊彦)

京都の民主運動史を語る会

4月例会

●例会は隔月開催。どなたでも参加できます。

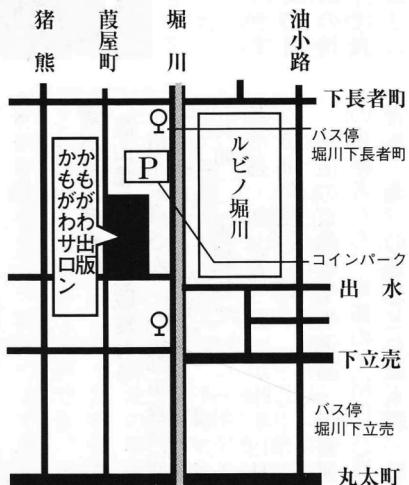
会員は無料、会員外の方は300円。

わが青春の「京都人文学園」

とき／4月28日（木）午後2時～

ところ／かもがわサロン 上京区堀川出水西入
☎075-415-7902

1面の「この一枚」参照



一面「この一枚」に掲載した「京都人文学園」がいままた脚光をあびている。1946年、人文学園に入学、卒業後も学園で仕事を続け、「30年史」も編集した杉本さんに、65年前の学園創立時の学生たちの生活、講師の先生方の熱情などを話していただきます。

杉本さんから「京都人文学園」の資料としては、30周年に編集した「わが青春—京都人文学園の記録」があります。最近「デモクラシーの展開と市民大学一大正から昭和まで」(かわさき市民アカデミー市民トークの会編著)が出版され、その中で「京都人文学園」が取り上げられています。また山崎雅子さんの「京都に於ける文化運動と京都人文学園」もあります。6月5日に予定している「人文65周年の会」には、「燎原」代表の岩井忠熊先生も元講師として出席されます。また最高齢(1919年生まれ)の元講師・鈴木亨先生(哲学、元大阪経済大学学長・理事長)もご出席の予定です。

例会当日は一期生だった私の目から見た人文学園を中心に語ります。

宗教のないお葬式

考え方・実例・手引

柿田 瞳夫・北添 真和 編著



A5判 160ページ
定価 1,575円(税込)

巻末にすぐに書き込める
【エンディングノート】付き

「あれよあれよという間に葬式代が高くなつた」
「葬儀社にいわれるまま、無我夢中ですぎてしまった」
「そんな後悔をしないために…」
故人が主役の感動的なお葬式のガイドブック。

成熟社会における
人権、道徳、民主主義

碓井 敏正 著

四六判 205ページ 定価 1,785円(税込)

キューバ史研究

先住民社会から社会主义社会まで
神代 修 著

A5判 230ページ 定価 2,739円(税込)

中支戦線従軍日記

ある通信兵の前線と銃後

中村 浩爾 著

四六判 344ページ 定価 2,100円(税込)

図書出版 文理閣

〒600-8146 京都市下京区七条河原町西南角
TEL.075(351)7553 FAX.075(351)7560